



神の母聖マリア (ルカ 2:16-21)

見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだった

みなさん新年あけましておめでとうございます。神の母聖マリアの守るべき大祝日です。日本の多くの人々が新年をどこか祈りの場所に詣でて出発しています。わたしたちは真っ先に教会に来て、新しい年が祝福に満ちた年であるように祈ります。特に、神の母聖マリアの取次ぎを願いたいと思います。

わたしが出した年賀状には、「桃栗三年浜串六年。本年もよろしくお願いいたします」と書きました。小教区の皆さんにはこのミサであいさつしますので特にはお出しませんが、もう6年も経過したのだなあと思います。司祭は6年経つと何が起こっても不思議ではありませんので、置かれた場所で咲くように精いっぱい努力したいと思います。

2015年わたしが思い出すのは3月17日の「信徒発見150周年」に向けて積み重ねてきた教区シノドスが「父の家に帰ろう、そして出かけよう」という提言案にまとめられ、公布されるという恵みがありました。そして12月8日には「いつくしみの特別聖年」も開かれるという年でした。また小教区でもみなさまのたくさんの方の支えによって、何とか務めてまいりました。2016年、本年もどうぞよろしくお願いいたします。

ところでミサの説教は、時に難しいと思うことがあります。いちばん難しいのは、同じテーマで違う説教を用意することです。神の母聖マリアの大祝日を始め、主の降誕、御復活などは同じテーマです。たいていの福音朗読は、マタイ・マルコ・ルカの共観福音書を順に使用するので全く同じテーマにはなりません。

神の母聖マリアの大祝日は違います。テーマが同じですから、わたしは23年同じテーマと向き合って違う説教を考えているわけです。これはなかなか大変なことです。一字一句違えずに同じことを話しても気付かれないかもしれません。それでいいじゃないですかと思うかもしれませんが、同じ話を毎年話してくださいとみなさんが言われたらきっと辛いと感じることでしょう。わたしも同じことです。そういう苦勞を味わいながらの元旦の説教であります。

神の母聖マリアの大祝日にあたり、まず羊飼いたちの思いに分け入りしたいと思います。羊飼いたちが見聞きしたこと、それは主の降誕夜半の福音朗読にある通りです。「あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」(2・12)今日の福音朗読にも同じことが書かれています。

もしかしたら、羊飼いたちは天使の言っていることを文字通りには受け取っていなかったかもしれません。「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。」

(2・11) このメッセージは良いとしても、あとに続く言葉に羊飼いたちは顔を見合せたのではないのでしょうか。「救い主」が、「主メシア」と呼ばれる方が、布にくるまって飼葉桶の中に寝ているだろうか。半信

半疑でいたとしても不思議ではありません。

羊飼いたちは「急いで行って、マリアとヨセフ、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。」(2・16) 羊飼いたちは、すべて天使の話したとおりの光景を見ました。羊飼いたちが半信半疑でいたとすれば、目の前の光景は最初の疑念を吹き飛ばすのに十分だったでしょう。見事に、貧しくみすぼらしい光景。救い主が、主メシアが、布にくるまって飼葉桶に寝ていたのです。

ではなぜ羊飼いたちは、「見聞きしたことがすべて天使の話したとおりであったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った」(2・20) ののでしょうか。そこにはマリアとヨセフが大きく関係していると思います。

マリアとヨセフが、わが子を喜んで抱いていた。たとえ布切れにくるんで飼葉桶に寝かせなければならなかったとしても、そこに神の計画を汲み取ろうとし、使命に忠実に従い、約束された救い主を迎えることができ、本当に喜んでいて。この姿が、羊飼いたちにとってすべてを納得させる決め手になったのではないのでしょうか。

羊飼いたちは最初半信半疑だったかもしれませんが、ヨセフとマリアが少しの疑いもなく、目の前にいるわが子を約束された救い主として受け入れておられた。特にマリアは、「これらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」(2・19) のでした。これが羊飼いたちに勇気を与え、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせ、神をあがめ、賛美しながら帰って行ったのです。

羊飼いたちはヨセフとマリアの少しも動じない姿を見て、目の前にいる乳飲み子が救い主、主メシアであると理解し、人々に告げ知らせる力を得たのでした。これはわたしたちが取り組むべきお手本だと思います。

わたしたちもこれから新たな年に向かって歩み始めます。カトリックの信仰に自信をもって生きるため、神がいつもわたしたちのそばにいて守り導いてくださることに自信をもって生きるために、神の母聖マリアの動じぬ姿を一人ひとりの心に写し取って帰りたいと思います。

わたしたちは神の手の中で生きていると証するために、誕生にまつわるすべてを包み隠さず示しておられる神の母聖マリアに信頼を寄せて今年一年を過ごしていきましょう。あわせて今年一年が平和な年であることを願いましょう。